

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第26巻 第3号



不 動 滝

この滝は手取川支流、柳谷の上流部の標高約1,730mに位置します。写真で2段の滝が見られ、下段の滝を不動滝といいます。白山の登山道で最もポピュラーな砂防新道を、別当出合から少し登ったあたりから見るすることができます。不動滝やその上段の滝は、今から数万年前に噴出したといわれる新白山火山の溶岩にかかっている滝です。滝を構成する溶岩には縦の割れ目があります。この割れ目は溶岩が固結する際、収縮に伴って流れの方向にほぼ垂直にできたもので、その形から柱状節理と呼ばれています。最近の現地調査によると、上段の滝の落差は約40m、下段の滝（不動滝）の落差が約60mあるということです。現在は2段の滝ですが、古く（明治末期から大正初期）は3段であったらしく、当時は最下段の滝（現在は消滅）を不動滝といい、現在の不動滝は高さも低く貧相であったといわれています。滝の形や段数も年月が経てば変化することを物語る、一つのよい例です。

(東野外志男)

尾瀬、上高地そして白山

百武 充



日本の国立公園：日光(尾瀬)



日本の国立公園：中部山岳(上高地)

国立公園と私

記憶に残る観光地はどこかとか、もう一度行ってみたい観光地はどこか、といった調査が、いろいろな機関によってよく行われます。そして、これらの調査で常に人気があるのは、上高地、尾瀬、箱根など、多くが国立公園です。国立公園は、日本の自然の風景地の中で、もっともすぐれたところを指定し、自然をまもりながら健全な利用を推進しようとする制度です。

私は国立公園の現場で多面的な業務にあたる国家公務員 国立公園管理官(パークレンジャー)として、いくつかの公園で働いてきました。現地駐在、あるいは管理事務所勤務としてかかわってきた公園は6か所です。数があまり多くないのは、現地以外のところに勤務していたこともあるからです。働いた公園を順に書くと、尾瀬、白山、阿寒、中部山岳、西表、十和田八幡平です。それぞれ高い自然性を持つ、すぐれた国立公園ですが、その特性は皆はっきりと異なっています。高層湿原と湖沼とそれを囲む森林が、静謐をたたえる尾瀬。深い針葉樹の森が珠のような湖を抱いている阿寒。3千メートルの豪壮な岩の殿堂を連ねる中部山岳。亜熱帯の華麗な自然とユニークな生物相を持つ西表。日本庭園のような奥入瀬溪流やみごとなブナ林を持つ十和田など、どこもすばらしい自然があります。また、その間、1966年から2年間は、光栄にも白山国立公園の初代レンジャーとして勤めることもできました。

30年を越える国立公園とのかかわりの中でも、初めての勤務地の尾瀬、在職中と環境庁職員をやめてからと2度にわたってかかわった上高地と、日本を代表するこの2つの場所で、自然に包まれるような生活をしながら自然をまもる仕事ができただことは、限りない幸運であったと思います。



日本の国立公園：阿寒



日本の国立公園：西表



日本の国立公園：十和田八幡平
(奥入瀬渓谷)

国立公園の制度と歴史

世界で国立公園制度を最初に作ったのはアメリカで、1872年イエローストーン国立公園を指定したことに始まります。すぐれた自然を国の財産として、そのままの形で後世に引き継ごうという思想はすぐに各国に広まり、いまでは世界中の主な国はすべて国立公園を持っているといってもよいほどです。

日本では、国立公園をつくらうとする動きは、20世紀のはじめごろから、日光や富士山麓で、海外の観光客を呼ぶことを目的として、地元から国への請願という形ではじまりました。しかし、狭い国土に多くの人々が住み、昔から土地の隅々まで集約的に利用していた日本では、広大な手つかずの自然を持つアメリカとは異なる、独自の制度をとる必要がありました。それが「地域制」と呼ばれるものです。

地域制とは、国有地とか民有地とかの土地所有にかかわらず、一定の地域を国立公園として国が指定する制度なのです。つまり、日本では、国立公園区域内の土地は、公園の目的だけに使われるのではなく、農林業その他の産業も同時に行われ、人の生活が行われることもあるところなのです。国立公園行政は、それら他の産業との調整をはかりながら行われなければならないという制約があります。国立公園に新しい道路を作ったり、ダムや発電所をつくらうという計画が、自然を破壊するとして問題になることがあるのは、このためです。アメリカの国立公園は、土地のほとんどすべてが公園を管理する内務省のものであるため、このような問題はおこらないのです。



外国の国立公園：バンフ(カナダ)



外国の国立公園：ドニャーナ(スペイン)

ともかく、いろいろな制約の中で調査や準備が進み、1931年には国立公園法が制定され、それに続き、1934年瀬戸内海、雲仙、霧島の3国立公園が指定されました。その後、第2次大戦中、人と予算のすべてを戦争に集中するために、一時的に公園事務が停止されたことがあったものの、終戦後まもなく、占領軍の指示もあって復活し、1946年以降、新たな国立公園の指定も順次行われました。また、1957年には国立公園法が大幅に改正され、新しく自然公園法として生まれ変わりました。そして、現在まで70年近くの歴史を重ねています。この間、ときに開発に対する防波堤にならないなどの批判を受けることはありましたが、常に日本の自然保護制度の中心となる役割を果たしてきたことは否定できないでしょう。

現在28の国立公園が指定されており、その面積は約200万ヘクタールあって日本の5%あまり、55の国定公園と約300ある都道府県立自然公園を合わせた自然公園全体の面積は533万ヘクタールで、国土の14%以上に達しています。



ビジターセンター(上高地)



ビジターセンター(上高地)



ボランティアによる解説活動



ボランティアによる解説活動

国立公園における解説活動

国立公園は、日本を代表する自然の風景地の保護と利用という、二つの目的のために指定されます。このうち利用については、質の高い利用を促進するため、さまざまな働きかけが行われています。ハードウェアとしては、白山国立公園にももちろんあるのですが、その公園の歴史や自然を、パネルや写真等で紹介するビジターセンター、自然解説板や植物ラベルを設けた自然探勝路が代表的な施設です。また、ハードだけでなく、パークレンジャーやボランティアなどによる解説活動のようなソフト面の充実もはかられています。これらの人たちはビジターセンターなどを活動の拠点にして、さまざまなプログラムを組み、自然解説ツアーやスライドショーなどの行事を行っています。

また、白山などいくつかの公園では、「緑のダイヤモンド計画」と呼ばれるハード・ソフト両面にわたる総合的な整備も行われています。環境庁のパークボランティアは1985年に募集がはじまり、現在30数か所で1,000人以上のボランティアが自然解説や清掃活動に活躍しています。ほかに、同じく環境庁が委嘱している自然公園指導員や、都道府県が募集したボランティアなど、大勢の人や団体が活動しています。

白山の魅力とガイドシステムへの期待

1962年に国立公園になった白山は、面積こそ47,700ヘクタールと大きくはありません(ちなみに、日本で一番広い国立公園は北海道の大雪山で、神奈川県とほぼ同じ23万ヘクタールあります)が、

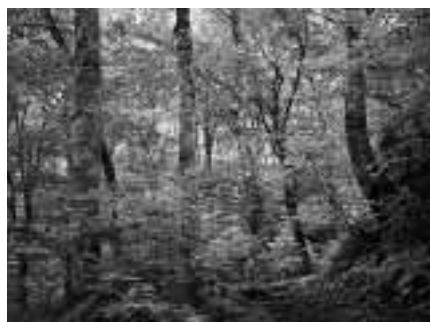
信仰登山の長い歴史と多彩な自然資源を持ったすぐれた山岳公園です。いまさらいうまでもなく、白山は単に郷土の誇りというだけでなく、山頂部の広大なハイマツ群落と豊かな高山植物、山麓各所に広がるブナ林、各所に湧出する温泉、ツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンザル、イヌワシ、クマタカのような大型動物の生息など、数多くの魅力にあふれた第一級の自然を持っているところ

です。
また、高い山の割には登りやすく、登山道をはじめとする利用施設や解説施設もよく整えられています。しかし、そのことが逆にせまい山に多すぎる人が入りこむオーバーユース(利用のしすぎ)を引き起こす危険もあります。このあたりは、管理する行政サイドと利用する側との、十分な自覚と協調が求められるところではないでしょうか。

いま石川県が計画している白山自然ガイドシステム*は、つまるところ、白山の自然をまもり、いつまでもその価値が損なわれないように、白山の豊かな魅力を、より多くの人と分かち合おうとする制度だと思います。具体的な展開は今後定められることになるでしょうが、それは単に白山の自然の知識を深めることだけではなく、広く自然に共感を持ち、自然の価値を認めることのできる人を、一人でも多く育てる制度でなければなりません。そのような人が多くなることで、自然をたいせつにし、自然を離れては生きていけない生物としての人類の、未来の繁栄を保証する唯一の道だからです。

また、公園を訪れる人にはたらきかけるのは、特別な訓練を受けた人だけではなく、国立公園にいろいろな立場でかかわるすべての人がつとめるのがよいでしょう。ガイドシステムの活用によって、白山国立公園が、自然と共に生きる人間の未来に向けての情報の発信基地となることを期待しています。

<(財)日本鳥類保護連盟>



白山の自然：ブナの森



白山の自然：高山のお花畑



白山の自然：蛇谷(姥ヶ滝)



白山の自然：ニホンカモシカ



白山の自然：イヌワシ

*白山自然ガイドシステム

石川県では、平成9～11年度の3年間をかけて、白山での豊かな自然体験活動をすすめていくために、指導者の養成や指導者用の解説マニュアルを作成するとともに、将来の白山におけるガイドのあり方を検討しています。

自然の素晴らしさを伝えるには

～インタープリテーション(自然解説)という方法

川嶋 直

清里・財団法人キープ協会というところ

私が仕事をしている清里高原は、金沢から車で5時間位走った所にあります。山梨県の北西の端、長野県との県境近くにある高原の町です。JRで一番標高の高いところを通る「小海線」の清里駅近くにキープ協会があります。お隣の駅は日本で一番高いところにある「野辺山駅」です。キープの標高は1,300～1,500m、真冬日がひと冬に40～60日くらいあります。首都圏から手軽に出かけることが出来る避暑地として人気が高く、年間250万人が訪れるといわれています。

キープとはKiyosato Educational Experiment Project(清里教育実験計画)の頭文字をとったもので、約60年程前に清里にやってきた米国人ポール・ラッシュ博士によって始められた団体です。清里の駅近くから八ヶ岳に向かう約250ヘクタールを山梨県から借地し、幼児教育、青少年教育、農業、環境教育、国際協力など様々な事業を展開しています。

財団法人とはいっても民間が作った財団ですから、実はほとんど財のない財団法人です。敷地は山梨県からの借地で基本財産もほとんどなく、免税措置もないから寄付金も少ない、収入のほとんどはキープを訪れる約百万人の人が落とすお金です。

キープの250ヘクタールの敷地に、教会、保育園、農場、宿泊研修施設、環境教育施設などが点在しています。キープの農場には約150頭のジャージー種という乳牛がいます。このジャージー種の牛乳で作ったソフトクリームが人気で、夏には長蛇の列が出来るほどです。

そのキープ協会で、私たちは約15年ほど前から、自然体験を中心とした環境教育プログラムを実施しています。年間17回の宿泊プログラムと、年間100件近くの受託事業を実施しています。私たちは「自然を伝える」ということを職業にしているのです。



キープ協会全景・八ヶ岳の麓



八ヶ岳の麓、標高1,400mにたつ
キープ協会の宿泊研修施設「清泉寮」

「自然ガイド」と「自然のインタープリテーション」と...

「自然を伝えるということ」。私たちはこれを「事業」にしています。事業にするということは、そのサービスを受ける方から対価をいただいて仕事をするということです。この事業は、最近ようやく赤字体質から抜けだしました。

キープには「自然を伝えること」を本業としている人間が8名います。私たちは、この仕事を「インタープリテーション」と呼び、それを行う人間を「インタープリター」と呼んでいます。この呼称はアメリカの国立公園で一般的に用いられているものです。なかなか日本語に上手に言い換えることが出来ず、米国の呼称のまま使っています。

さて、「ガイド」と「インタープリター」とはどう違うのでしょうか。我が国ではガイドのほうがずっと一般的な言い方でしょう。インタープリターとはそもそも「通訳」という意味ですが、自然を伝える役割として「自然の通訳」「自然と人間との橋渡し役」というような意味で使われています。「インタープリテーション」のことを、その初期のアメリカの研究者チルデンは「単に事実や情報を伝えるということよりは、直接体験や教材を活用して、事物や事象の背景にある意味や相互の関係性を解き明かすことを目的とする教育的活動である」と定義しています（「インタープリテーション入門」小学館）。つまり、山や花の名前やその由来などを伝えることが目的ではなく、その花のことを伝えることによって、一体何を、どんな意味を伝えようとしているのかが「インタープリテーション」では、大切なのだといわれています。

自然を伝える意味とはどういうことなのでしょう

それでは、自然の事物の紹介を通じて私たちは一体、どんな意味を伝えようとしているのでしょうか？ 私たちキープ協会環境教育事業部にとっての意味は「環境教育」の目的そのものです。つまり「地球の自然の素晴らしさを知り、現在人間が直面している環境の問題を知り、そして、そうした問題に対して何等かの働きかけが出来る人を育てる」この目的の実現のために、人々に自然の素晴らしさを伝える「インタープリテーション」活動を実施しています。

自然を伝える人の中には「私は、そんな意味など関係ない。ただ自然が好きだからそれを他者に伝えたいだけ」という人もいるでしょう。それはそれで結構なのですが、今、この時代に、自然を伝えるということの社会的意味、期待される今日の意味は何なのかを認識しておくことは必要なことでしょう。ただ「個人的な趣味ですから...」といっても、時代はそれ以上を期待しているということなのです。みなさんは一体何のために自然を伝えるのでしょうか。一度問い直してみても良いのではないのでしょうか。

こうした自然を伝えることを事業化している 「自然学校」が全国で増えています

現在我が国のいくつかの自然学校は、国立公園などを舞台にして、あるいは旅行会社などとタイアップして、全国に数十校の自然学校が成立するまでになりました。例えば富士山の麓には昨年3万5千人の子どもたちを受け入れている自然学校があります。樹海の自然散策から、家畜を使った様々な自然体験プログラム。熱気球やパラグライダーなどの野外活動プログラムなど、多彩なプログラムを用意して子どもたちから高い評価を得ています。

環境庁を始めとして、建設省や林野庁あるいは文部省なども、それぞれ名称は違っても、大きな意味ではこの「自然学校」を今後の事業のひとつの柱にしようという動きが出てきています。今後ともこうした動きはますます盛んになって行くことでしょう。こうした自然学校のネットワーク組織として「(社)日本環境教育フォーラム(03-3350-6770)」があります。自然の学校の様子を紹介する図書なども発行されていますので一度お問い合わせ下さい。

自然の伝え方の新しい工夫とは

私もこの仕事を始めた最初の頃は、普通のバードウォッチングをやっていました。つまり、目に耳にする鳥を片っ端からあれはナニ、これはナニと種名を連呼するスタイルを…。ある日参加者の一人から指摘を受けました「自分つまらなかった。帰りたくなった。自分が自然について何も知らない、ということのはっきり分ったけれど、二度とこうしたバードウォッチングに参加しようという気になれない。つまり、知識の有無が優劣を決めるような空気が支配するこの時間では、私の様な初心者にはただ劣等感や疎外感を感じるだけだった。」ショックでした。私は一体何のためにこのバードウォッチングの集いをやったのでしょうか。その集いにはどんな意味があったのでしょうか。始めてこうした集いに参加して「二度と参加しまい!」と決意させてしまうなんて…。それならば、やらないほうが良かった。深く反省して、それから、森の中で季語や字余りを気にしない自由な俳句を詠んだり、ただ寝転んで気持ちの良い時間を過ごすだけ、などという新しい(本当はごくあたりまえの)自然の伝え方を工夫するようになったのです。



はく製やぬいぐるみを使った観察会
小道具も有効に使用している。



「森の句会」
雨の中、傘をさして森の中で俳句を詠む。

こうして私たちは、誰もが平等な自然観察会への工夫を始めました。これは、科学的に自然を見つめることを決して否定しているわけではありません。ただ、その他にも様々な自然の見つめ方があるということ。そして、本当は「意味」にたどり着くための「手段」であるはずの科学的な知識が、いつのまにか「目的」とすり替わってしまうというような自然の伝え方は、ちょっと考え直す余地があるのではないかと思うだけなのです。

さいごに

ある講演会で「おとなはもう駄目ですよ！今更何を言っても変わらないでしょう。未来を託す子どもたちにこそ環境教育が大切だと思うんです。子どもが変ればきっと大人も変わります。期待する彼らにこそ、環境教育が必要だと思うのですがいかがでしょう？」と質問されました。私は真っ向から反論しました。「大人が変われないで、どうして子どもが変われるのでしょうか。僕たち大人が解決できない問題を、自分たちでなんとかする努力をしないで、子どもたちにその解決を期待することが環境教育なんのでしょうか。そんな大人のする教育に、一体誰がうなずくのでしょうか？ まず、私たち自身が変わることなんです。この素晴らしい自然環境を彼らの世代にちゃんとパトタッチするために。」と答えました。さあ、私たちは、変ることが出来るのでしょうか。一緒に努力しましょう。

財団法人キープ協会環境教育事業部

〒407-0311 山梨県北巨摩郡高根町清里3545

電話 0551-48-3795 ファクス 0551-48-2990

<http://www.sannichi-ybs.co.jp/KEEP/FORESTERS/>

< 財団法人キープ協会 >

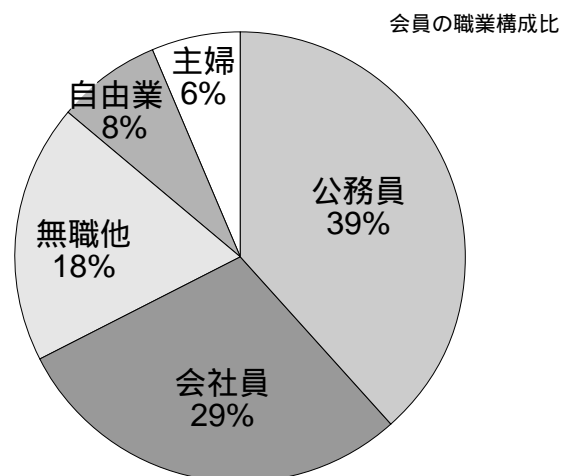
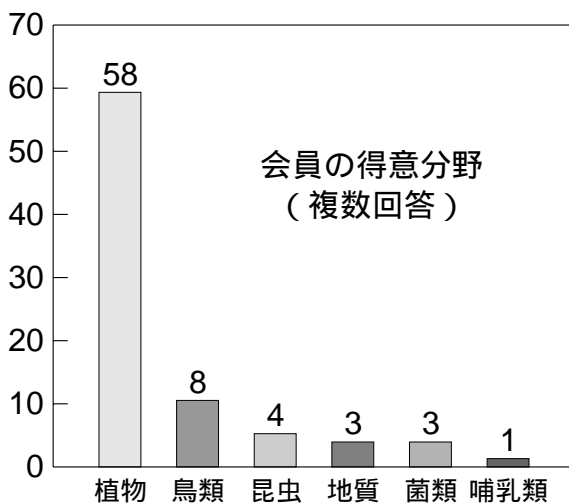
石川県自然解説員研究会の活動について

三谷幹雄



はじめに

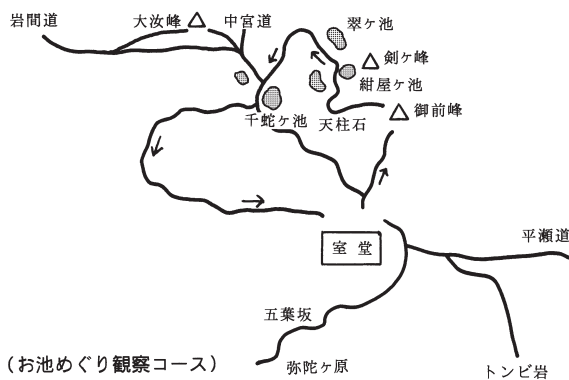
昭和57年に石川県は白山を訪れる方々に自然解説を行ってもらうため、「白山自然解説員養成講座」を開講しました。受講した54名が「石川県自然解説員」となり、この年7月から白山国立公園における「自然観察会」を主とした解説活動がスタートしました。翌年には自主的な団体として「石川県自然解説員研究会」を設立しました。そして昭和61年以降、本研究会が県からの委託を受けて自然解説活動を継続しています。解説員研究会の発足当時、隣県の富山県では既に「富山県ナチュラリスト研究会（現在の富山県ナチュラリスト協会）」が発足していましたし、「城端町ナチュラリスト」といったグループも活動していました。当会においても、こうしたグループとの意見交換を行うなど、解説活動の資質の向上に努めてきました。研究会は、発足以来今年で15年が経過しました。現在の会員数は65名（うち女性10名）です。会員の得意分野、職業別構成比などは図でもわかるとおり、かなりバラエティにとんだ集団となっています。



当会の目的は、会則にも定めていますが、「ボランティア精神に基づき自然解説活動を行うとともに、自然解説員としての資質の向上並びに、石川県内における自然環境の保全及び自然保護思想の啓蒙普及と、会員相互の親睦を図ることを目的とする。」というものです。こうした活動理念に基づき微力ではありますが努力を積み重ねています。今日では、活動範囲も白山国立公園に限らず、金沢近郊・加賀地区・能登地区にも及んでいます。ここで、私たちの活動の一端をご紹介しますと思います。



お池めぐりコースでの観察会



解説活動の現状

白山地区における解説活動は、表のとおり、室堂周辺と山頂池めぐりコース、別当出合登山口から室堂間の登山道で行っています。平成10年より、新たに南竜ヶ馬場地区が加わりました。その他、白山自然保護センター中宮展示館と周辺観察路でも、年8回の観察会を実施しました。

平成10年の夏は天候が安定せず、風雨や濃霧のため野外での活動が十分にできませんでした。また、高山植物の開花時期が早く、登山者が最も多くなる7月末にはクロユリなどの高山植物の中には、既に開花を終えているものも多く、自然解説員にとって難しい年でした。反面、悪天候で屋内に閉じこもらざるをえない登山者にはスライドの上映が大変喜ばれました。本年は室堂地区での解説活動は、解説員を一人増やし、二人体制に増員しました。表からもわかりますが、解説員一人につき参加者は平均約22名となっています。これは従来の解説活動が一人につき約30人ということから考えれば、登山者へのサービスの向上を図ることができたと思っています。



「白山登山と高山植物の集い」

また、白山の夏山開きの前の6月中旬には、「白山登山と高山植物の集い」として白山登山の心得や白山の自然について紹介する催しも行っています。平成10年度は白山自然保護センターと石川県自然解説員研究会が共催で、6月12日に野々市町の野々市文化会館フォルテで行いました。

平成10年における白山地区の解説活動

室堂地区（7/18～8/17の31日間）2泊3日2人体制で解説員 29名

解説場所他	お池めぐりコース	室堂周辺	スライド	その他	合計	期間の 宿泊者数
解説員人員	28	62	18	12	120	
実施回数	14	32	9	6	61	
参加者数	619	1,408	431	153	2,611	

別当出合～室堂間（7/25・26、8/1・2、8/8・9、8/15・16）1泊2日2人体制で解説員 8名

解説場所他	砂防新道上り	砂防新道下り	観光新道下り	その他	合計
解説員人員	8	4	4	4	20
実施回数	4	2	2	4	12
参加者数	257	14	75	123	469

南竜地区（7/25・26、8/1・2、8/8・9）1泊2日2人体制で解説員 6名

解説場所他	砂防新道上り	砂防新道下り	南竜ヶ馬場	スライド他	合計
解説員人員	6	6	12	4	28
実施回数	3	3	3	5	14
参加者数	89	66	201	135	491

観察会で最も重要なこと

日ごろ感じるのですが、観察会で最も重要なことは、解説者の自然への思いやりが解説を受ける側に、どのように伝えられるかということではないでしょうか。そして解説をする側と解説を受ける側との間の会話を通じて、一つでも印象に残るものがあれば、その解説活動は成功です。そのためには自然についての知識を蓄えることに加え、“会話術”の向上にも努めなければなりません。会員同士、お互いの知恵や知識を出し合い研鑽を深めていますが、時には専門家を招いての研修会を実施したり、他で行われているいろいろな観察会に参加し、良いところを取り入れるようにしています。また、他県との交流も今までより拡大し、平成10年は「奥日光パークボランティア」のグループとの現地での観察会や意見交換会を実施しました。

今後の課題

近年の登山者は40歳以上の熟年者が多くなったこと、また男女比では女性の割合が多くなったことがあげられます。また、こうした登山者が旅行会社などのツアーで訪れることが多くなりました。これらの事実は、「はくさん」第25巻第1号で紹介されている白山登山者へのアンケートの結果からもわかります。この様な状況から私たちとしても自然解説とあわせて「安全な登山」を訴えていくことも一つの義務となってきました。従って当会の研修会でも「救急法」の訓練もあわせて実施するなど、登山対象者の変化に沿った解説活動を心がけています。

当会の主テーマでもある環境保護の問題は、ここ1～2年、急速に私たちの生活の中にも直接的な行動を伴う義務として現れてきました。白山国立公園ではゴミの持ち帰り運動が既に定着していますし、観光地での無料の公共的な施設でもゴミ箱が少なくなってきました。また、限られた自然環境を損なうことのないように、白山では登山者の平準化のため宿泊施設の予約化が取り入れられています。

今後、自然により深く親しみたいと思う人々が増え、解説員の活動は更に重要になってくるでしょう。当会としても、新しい会員を増やしていくとともに、時代や状況の変化を認識し、常に新しい情報を取り入れていくことが必要だと考えています。

<石川県自然解説員研究会>



観察会に思うこと

中村真一郎

白山自然保護センターの役割の一つとして、普及啓蒙・教化が挙げられます。白山国立公園の豊かな自然遺産や歴史遺産、自然保護に対する理解を深めてもらうため、昭和48年にセンターが開設して以来、さまざまな活動をしていま

す。各施設での展示や普及誌「はくさん」、「白山の自然誌」シリーズの発刊をはじめ、講演会・シンポジウム、そして自然観察会です。以前は多い年には年間6回の観察会を開催し、1泊2日、2泊3日といった宿泊をともなう形で行われてきました。現在のセンター主催の観察会は春と秋のブナ林観察会、冬のブナオ山観察舎での活動（共に日帰り）で、スタイルや回数は変化しました。

以前に比べると、様々な施設、団体などが観察会や催しを開催し、その数は以前より増加、多様化し、広がりをみせています。また近年は、自然志向によって増加した観察会などへの参加需要への対応や自然教育の普及などの目的でナチュラルリストや自然解説員（インタープリター）の養成活動も行われています。

何のための観察会か？

白山国立公園には、様々な見どころや生物が多く、四季を通じて魅力にあふれています。その恵まれた環境の中で観察会を企画、運営する上で大切なことがあります。それは、何のために？ ということです。自然保護・共生の関心が高まる時代です。新聞やテレビ、図書館や書店などで興味さえあれば、誰でも手軽に自然や環境の知識や情報を得ることが容易になりました。それでも観察会を企画・実施する意味は？ 参加者に理解してもらいたいことは？ 参加者は何を求めているのか？ 自然保護を意識したプログラムであれば、今後どのような問題解決につなげるためなのか？ 自然解説活動の目的として、「インタープリテーション入門」（小学館）では、

その場の適正な利用を促すこと

その場所を大切に人育てること

機関のイメージをPRすること

一般の人たちが保存・管理活動に参加するように奨励すること

レクリエーションの場を提供すること

周囲の自然や文化的環境への関心と理解を高めること

興味を刺激・啓発し、生活に新しい視点を与えること

とあります。

観察会などのソフト面での成果は、「かたち」としては目に見えにくいものです。センター開設25年目を迎えた今日、これまでの自然観察会の参加者が、今、自然や生活に対してどのように考えているのか興味深いところです。世界的に自然が減少している中、原始性を維持したままの白山が、現在もあることは感動的です。ある意味で、観察会も保護活動に少なからず貢献してきたのでしよう。ここ数年のエコロジーブームともいえる社会も、様々な教育活動による個人の環境に対する興味、関心が深まったといった意識レベルの向上が大きいと思います。

水の流れが常に変化するように、地球も変化を続けています。その上で生活していく私たちが、現在抱える諸問題をいかに解決の方向へ“良い流れ”として導き、次世代につなげていくかを考える時代。そんな時代の中で環境教育は不可欠です。小さな“良い流れ”を“大河”とするためにも、環境教育の一つである観察会や解説活動の技術や意識の向上は必要なことです。ただ単に教える、教えられるといった形ではなく、指導者と参加者で何か“新しいもの”を生み出せる一つの場として、観察会が機能する必要性を強く感じます。



人と自然に会いに行く

解説員(インタープリター)は、参加者に対し自然を楽しんでもらい、そして理解してほしいと望んでいます。また、それ以上に多くの人との出会いがあることに、魅力を感じています。なぜなら、参加者の方からも多くのことを感じ、学べるからです。「ハッ」とするような自然の見方をされるお母さんや、「ドキッ」とするような子供たちの感性や一言など、周りの自然に負けないようなすばらしさや愛おしさを感じることがよくあります。そんな時、「その人」と「そのもの」に大きな感動を感じるのです。違った視点からものを見ると、今まで気がつかなかったことが“観えて”きます。人も自然と共に、不思議で魅力的だ、と感じる瞬間です。

自然観察会は、自然を観察すると同時に、お互いに人も観察しているのだと思います。同じ場所でも人が変われば、全く性格の違う観察会になります。観察会には、その自然と同様に、参加する人も大変重要な要素です。観察会は単に知識や情報を伝えるだけでなく、喜怒哀楽など人間味豊かな人と人との活動なのです。ある意味で人間観察会?...そう、森の中であなたは逆に観察されているのです。あなたを見つめる相手は隣の人ですか？ それとも、目の前であなたを見下ろす大きなブナの木ですか？

私は「観察会」という場が好きです。

<石川県白山自然保護センター>

平成10年度 白山自然保護センター開催、開催予定の観察会

	日時	場所	内容	参加者
ミズバショウと春を楽しむ会 (環境庁と共催)	H10. 4.19(日)	白峰村 大嵐山	ミズバショウを楽しみ、春を感じてもらう。	30人
ブナオ山観察舎自然観察会 春の草花と動物たちをたずねて	H10. 4.26(日)	尾口村 一里野温泉スキー場	芽吹き始めた新緑のブナ林を楽しみます。	38人
大きなブナの木の下で 白山新緑のブナ林観察会	H10. 6. 7(日)	白峰村チブリ尾根	チブリ尾根登山道、約3kmを歩き、新緑のブナ林を楽しみます。	52人
ドングリからのメッセージ 白山紅葉のブナ林観察会	H10.10.18(日)	白峰村チブリ尾根	チブリ尾根登山道、約3kmを歩き、紅葉のブナ林を楽しみます。	台風のため中止
ブナオ山観察舎自然観察会	H11. 1.31(日) 予定	尾口村 ブナオ山観察舎周辺	ブナオ山観察舎で見られるニホンザル、ニホンカモシカをはじめ、雪の上の足跡、観察舎周辺の植物や越冬中の昆虫などを観察。	
かんじきハイキング 雪の上の観察会	H11. 2.28(日) 予定	尾口村 ブナオ山観察舎周辺	かんじきをはいて雪の上を歩き、その上に残された動物の足跡、観察舎周辺の植物や越冬中の昆虫などを探し、冬の生き物のくらしをのぞいてみます。	小学生以上 40人を予定
ブナオ山観察舎自然観察会	H11. 3.28(日) 予定	尾口村 ブナオ山観察舎周辺	ブナオ山観察舎で見られるニホンザル、ニホンカモシカをはじめ、雪の上の足跡、観察舎周辺の植物や越冬中の昆虫などを観察。	

田中 稔

梅雨明けが特定されないまま迎えた夏山。いつもより早く、そして暖かい秋。集中豪雨による台風被害等々...異常気象を感じながら今年は紅葉シーズンを迎えました。皆さんの期待には十分でなかったかもしれませんが、11月20日すぎのちょっと季節はずれの紅葉は神様のデザインそのもの。雄大な景観を見せてくれました。

ブナオ山中腹にうっすらと初雪が見られた11月20日にブナオ山観察舎が開館しました。最近、ブナオ山の南西斜面中腹ではクマタカが舞い、山頂の止木でデートして旋回を繰り返しているイヌワシの番いの姿が見られました。菜畑跡地ではカモシカの親子が採食し、10頭ほどの小さなサルの群れも遊んでいます。

そろそろ根雪も近いと思われます。斜面が雪で覆われ、動物達が観察しやすくなります。観察には暖かい服装で御来舎下さい。お待ちしております。



白山自然保護センターの観察会予定

- | | |
|----------------------|-----------|
| 1月31日(日) 10:00~正午 | ブナオ山自然観察会 |
| 2月28日(日) 10:00~14:00 | かんじきハイキング |
| 3月28日(日) 10:00~正午 | ブナオ山自然観察会 |



ブナオ山観察舎の壁にはアオゲラのあけた穴が見られます



センターの動き(9月22日~12月21日)

10. 3	白山の自然講座	(金沢市)	11. 5	自然系調査研究機関連絡会議	(山梨県)
10. 5~ 8	博物館実習受け入れ	(中宮展示館)	11. 5	市ノ瀬ステーション閉館	(市ノ瀬)
10.11	百万貫の岩まつり	(白峰)	11.10	中宮展示館閉館	(中宮展示館)
10.18	紅葉の白山ブナ林観察会 (台風のため中止)	(市ノ瀬)	10.10~11	中部地区管内ビジターセンター等担当者会議	(長野県)
10.20~21	白山国立公園関係4県担当者会議	(福井県)	11.16	森林生態系調査特別委員会	(金沢市)
10.25	白山自然ガイド野外実習	(市ノ瀬)	11.20	ブナオ山観察舎閉館	(ブナオ山観察舎)
10.25	石川の秋森づくり'98	(中宮)	12.17	白山自然ガイドシステム検討会	(金沢市)

編集後記

白山の自然講座を10月3日に白山自然保護調査研究会と共催で開催しました。講師に白山の自然や人文など様々な分野で白山を調査されている方々をお招きして、最近の研究成果も含め話していただきました。当日は約150名の参加がありました。

さて、今号は、8月29日に開催した白山自然ガイド講演会で講演された百武 充さんと川嶋直さんに国立公園や自然解説について、講演会当日の話の内容も含めて執筆していただきました。また、三谷幹雄さんには、石川県で自然解説活動を行っている石川県解説員研究会の活動について執筆していただきました。

センターの開催するブナ林観察会はいつも募集を開始すると、すぐ定員に達してしまいます。それだけ自然に関心を持つ方が増えてきているのでしょう。観察会の担当者はそれぞれ、観察会の前にはコースの下見や準備を行い、参加者にいろいろと楽しんでもらえるような工夫をします。どの場所で、どんな話をしようか。どのようにしたらより分かりやすいか。なにか笑わせたり、驚かせることはできないか、など。最近の観察会は、どちらかという動物や植物の名前ばかりにこだわるよりも、ゲーム的な要素を取り込むなど自然に親しみ、楽しんでもらえるようにしています。これまで、普通の雨でしたら時間やコースを変更して観察会を行ってきました。雨のブナ林は、晴れや曇りのときとは、また違った雰囲気があり、おもしろいのです。しかし、今年の秋の観察会は台風のため、中止にせざるをえませんでした。参加者の方も残念ですが、当日に向けて準備をしてきた担当者にとっても残念でなりませんでした。

ニホンザルやニホンカモシカ、イヌワシなどの野生の姿そのものを観察できる施設、ブナオ山観察舎が11月20日より開館しています。年末年始をのぞき、センター職員が常駐し、観察方法などについて案内します。また、観察会も予定していますので、ぜひ、ご参加ください。

(野上)

目次

表紙 不動滝	東野外志男... 1
尾瀬、上高地そして白山	百武 充... 2
自然の素晴らしさを伝えるには ~インタープリテーション(自然解説)という方法	川嶋 直... 6
石川県自然解説員研究会の活動について	三谷 幹雄... 10
観察会に思うこと	中村真一郎... 13
施設だより(ブナオ山観察舎)	田中 稔... 15

はくさん 第26巻 第3号(通巻109号)

発行日 1998年12月21日(年4回発行)
 編集発行 石川県白山自然保護センター
 920-2326 石川県石川郡吉野谷村木滑ヌ4
 TEL07619-5-5321 FAX07619-5-5323
 印刷所 株式会社 橋本確文堂

(本誌は再生紙を使用しています)